



新任職員挨拶

(社)島根県建設業協会出雲支部

原 佳文子

私が(社)島根県建設業協会出雲支部で勤務をさせていただいてから、早くも二ヶ月が過ぎました。前職とは全く違う職種に戸惑いながら一日一日が飛ぶように過ぎていきます。会員の皆様の顔と名前がなかなか覚えられず、ご迷惑ばかりおかけしています。事務局の皆さんは「分からないことはいつでも聞いてね。気長にやりましょう」と言って下さり、緊張していた私も気持ちになり、新人職員としてはとても居心地良く仕事をしております。

私は2人の子供の母親ですが、今まで勤務形態が不規則だったため、子供と接してやれる時間が少なく、子供の気持ちを満たしてやる事が出来ず、子育ての悩みが尽きませんでした。ここの職場は土日祝と決まった休みがあり、これからは家族と一緒に休日を過ごすことが出来ます。今までの分ももっともっと子供達とふれあって、良い家庭を築いていきたいと思っております。

また、趣味である吹奏楽で活動する中でチームワークの大切さを学びました。

それとは別に様々な人達との交流を大切にしてきました。他業種や自分とは異なる経験をした人との交流の場を積極的に持ち、物事を一つの方面から見のではなく、多方面から見るという柔軟な姿勢で仕事に取り組んでいきたいと思っております。今まで皆さんが作り上げてこられた良いチームワークを乱すことのない様、そしてこれからももっと良いチームワークで働ける職場になるよう、心がけをしていきたいと思っております。

最後になりましたが、皆様には今後も多々ご迷惑をおかけすると思っております。自分なりに努力し、少しでも皆さんのお役に立てるよう頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。



編集後記

近頃の日本の製品は、大衆受けするモノづくりで、携帯電話など半年とか一年もたてばモデル末期となりポイントを使えばタダでもらえる。単純な比較は出来ないが、我が家ではNTTになった今でも、旧公社時代の黒い手廻しダイヤルの電話機が、四十年現役として働いているのは、私の人生をとにもあゆむ一生モノといえる。

私ども建設業界においては、技能がもっとも大切なファクターであることは、言を待たない。現在、技能教育の多くは、マニュアル化され、先輩の仕事を真似ることに主眼が置かれ、自身で創意工夫をして、技能を極める視点を欠いているのではなからうか。

愚直に努力するという事は、単に先人の仕事を真似ることではない。その仕事ぶりを観察し、その上を目指して工夫し、その工夫の積み重ねが、愚直に物を作る中身のひとつである。そして自分の頭のなかにある仕事のあるべき姿と比べて、間違いはないか、行動が異なっていないか、確認し繰り返し体で覚えていくと、最後は黙っていても体が自然に動くようになる。これが一生モノの仕事というものではないか。

今の世の中、モノ作りの匠が、もっと賞賛され、しかるべく遇し方があってもよいように思う。

経営改善研究委員 永田 隆一





—表紙のことば—

イラストと文 渡部良治

古代出雲のシンボル、出雲大社の東隣に3月10日「島根県立古代出雲歴史博物館」がオープンしました。島根県が全国一の出土数を誇る弥生時代の青銅器群や、大社境内から出土した宇豆柱などの一級品がずらりと並べられ、いにしへのロマンを求める来館者を感嘆させています。

初年度の年間目標30万人の来館者を目論んでいた同館は4月5日、オープン1ヶ月を待たずして来館者が5万人を突破し、幸先のいい出足となりました。2年目以降の目標は年間2万人に設定しています。新設の博物館は2年目以降に来館者が落ち込むのが定説となっています。出雲大社を訪れる年間200万人の参拝者をいかに取り込むかが課題です。

今後、大社町内には、出雲市が計画する「門前町再生開発、出雲阿国座建設」という最大のテーマが控え、私たちは市外から訪れる観光客を“おもてなしのこころ”を持って迎えたいものです。